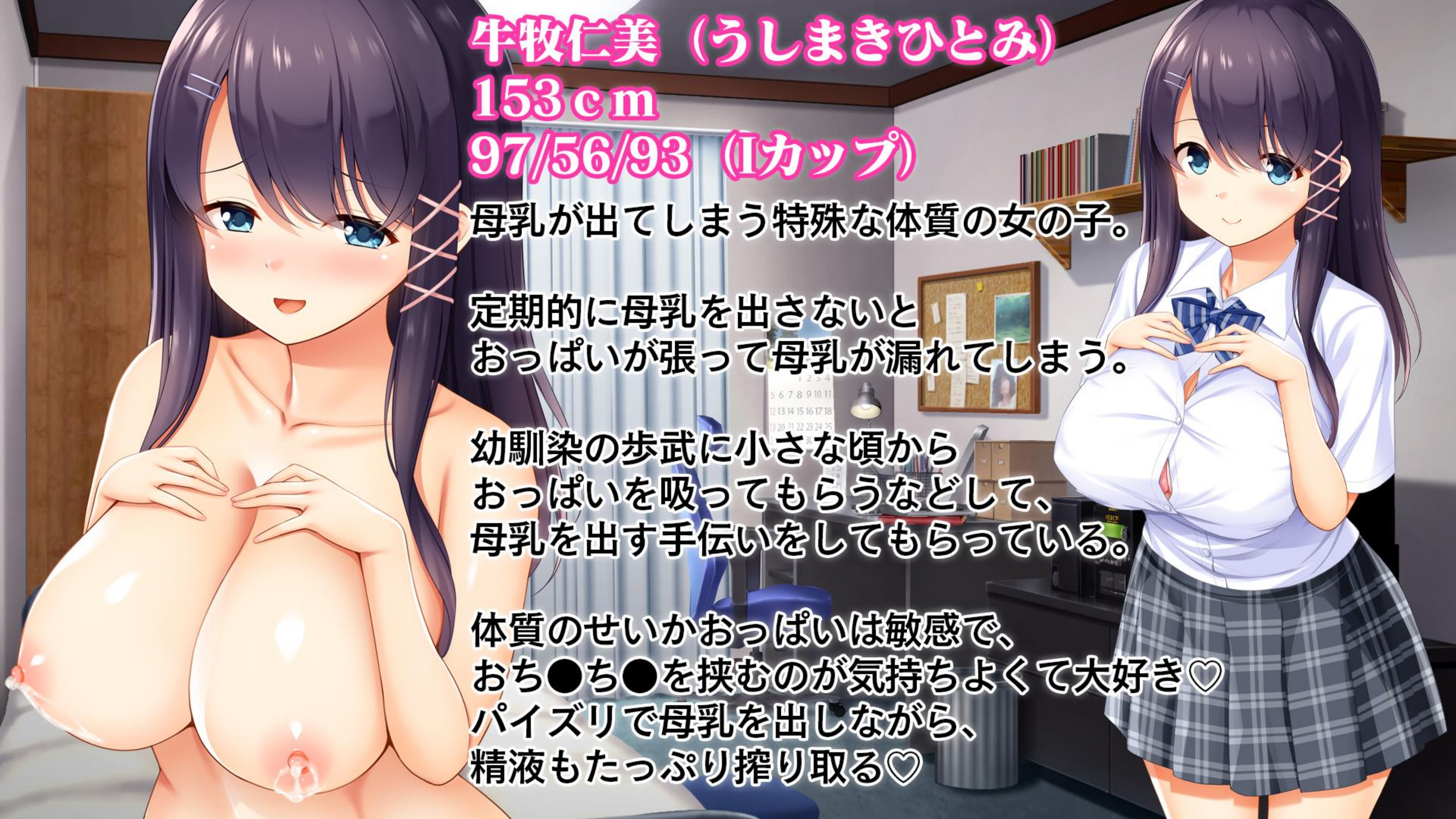
母乳幼馴染のおっぱいは俺のもの
吸って、揉んで、挟まれて!
幼馴染のたわわなおっぱいでチ●ポミルクも大噴出!
成人向けCG集
基本CG11枚　本編枚数210枚
STUDIO
山口マン
PRODUCTS

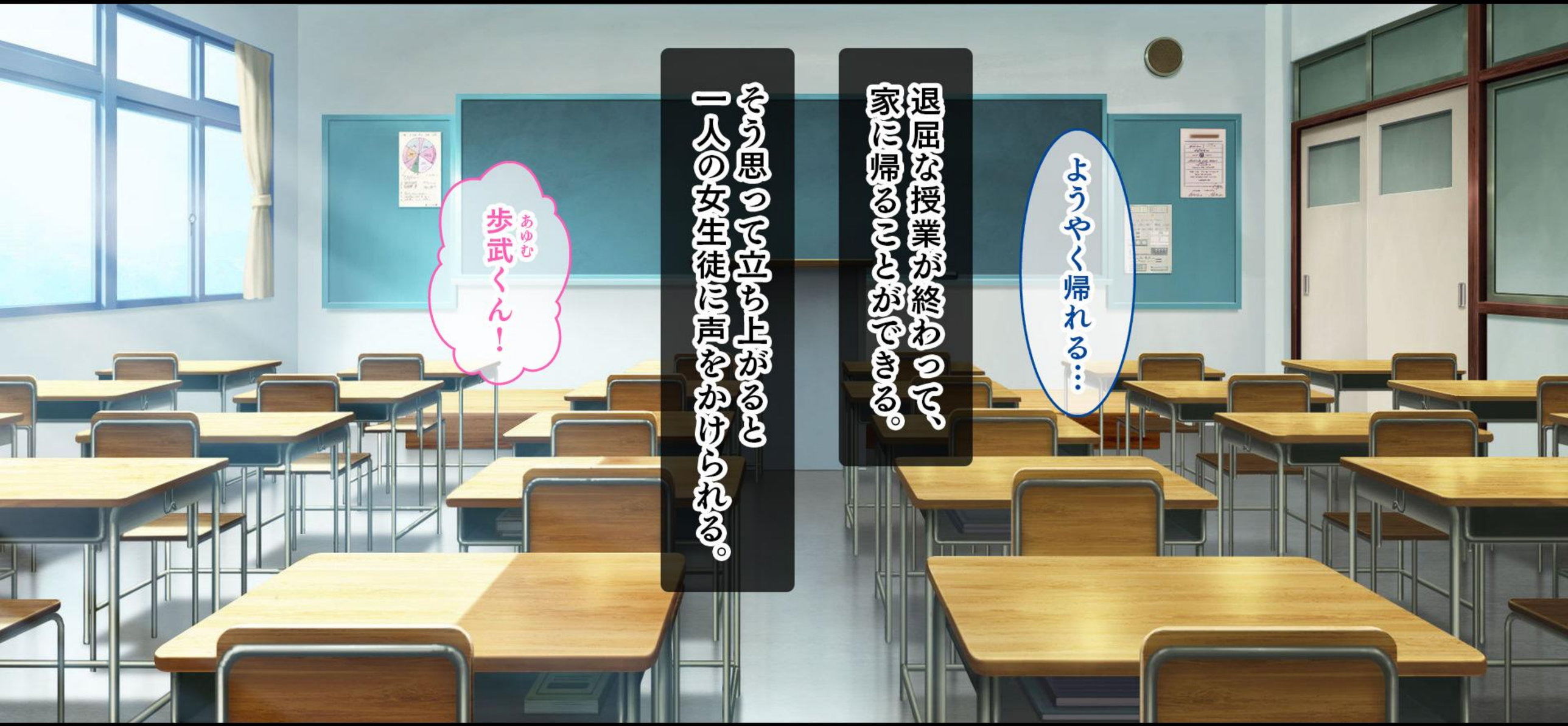

牛牧仁美（うしまきひとみ）
153ｃｍ
97/56/93（Iカップ）
母乳が出てしまう特殊な体質の女の子。
定期的に母乳を出さないと
おっぱいが張って母乳が漏れてしまう。
幼馴染の歩武に小さな頃から
おっぱいを吸ってもらうなどして、
母乳を出す手伝いをしてもらっている。
体質のせいかおっぱいは敏感で、
おち●ち●を挟むのが気持ちよくて大好き♡
パイズリで母乳を出しながら、
精液もたっぷり搾り取る♡

それじゃあ…
お願いします

ギシッ

目の前で幼馴染がおっぱいを出して、
俺のベッドに横たわる。
ぷるん♪
彼女の乳首からは母乳が溢れ、
室内には鼻に残るような濃厚な
甘い匂いが充満していた。
俺はまるで花の蜜に誘われる虫のように
口を開けておっぱいへと近付く―

これは幼馴染の彼女との
誰にも言えない秘密の日常だ。


ようやく帰れる…
退屈な授業が終わって、
家に帰ることができる。
そう思って立ち上がると
一人の女生徒に声をかけられる。
歩武(あゆむ)くん！

それじゃあ帰ろうか！
…いいけど一人でも別に帰れるだろ？

むぅ
そんなつれないこと言わないでよー
家は隣同士なんだから帰る方向は一緒でしょ？
それに幼馴染だし！
幼馴染はあまり関係ないだろ…

彼女の名前は牛牧仁美（うしまき ひとみ）
家が隣同士ということもあって、
生まれた時からの幼馴染だ。

親の仲がよくて、
我が家の犬山（いぬやま）家と牛牧家で
旅行に行くこともある。

はぁ
まあ別にいいけど

ふふっ
歩武くんは優しいねっ
今日も二人で帰るの？
本当に仲がいいね
それで付き合ってないんでしょ？
もう付き合っちゃいなよー
二人ともからかわないでよー

こんなふうにクラスメイトから
茶化されながら一緒に下校するのは
●学生の頃からの習慣だ。

一カ月前に●校生になったのだが、
今も同じ学校、同じクラスで、
こうして一緒に下校している。

仁美、帰るぞ

あ、待って歩武くん

二人ともまた明日！

それでさ
みっちゃんがねー
下校中はよく仁美から
今日学校であったことを聞かされる。
話は家に着くまで尽きることはない。
学校で一緒にいることが多いのだが、
自分の知らないところで
いろいろあるのだなと毎回思う。

あ、それから、っ！
不意に仁美の話が途切れる
その様子からすぐに気付いた。
仁美…もしかして…
う、うん…急に…
ちょっとだけ出ちゃったかも…
…急ぐぞ
ダッ

ガチャッ
駆け足で向かったのは俺の家だ。
俺たちの親は共働きで、夜にならないと帰ってこない。そのため今この家には俺と仁美だけしかいない。
なんとか間に合ったか？
自分の部屋に入って仁美の状態を確認すると―

うう…安心したら
けっこう出てきちゃった
あー…まあ外で
出しちゃうよりいいだろ
そうだけど…
ピュッ
ピュッ

仁美は母乳が出てしまう
特殊な体質だ。
小さな頃から母乳が出てしまう彼女は、
定期的に母乳を出さないと
おっぱいが張って苦しくなり、
このように漏れてしまう。
昔は器具を使って
母乳を出していたのだが―
それじゃあ…
お願いします

恥ずかしそうにしながらも、仁美は
制服のボタンを外しておっぱいを出すと、
俺のベッドに横になった。
ぷるん
歩武くん
今日もいっぱい吸ってね
…ああ

ちゅぱっ
んんっ！
ぎゅぅ

仁美の言葉を聞きながら
俺は母乳を飲み続ける。

昔は器具を使って、
仁美が一人で母乳を出していたが、
今ではこうして俺が
母乳を出す手伝いをしている。

きっかけはまだ性知識をろくに知らない小さい頃、器具を使って母乳を出すのが難しいと仁美に相談された時だ。
二人でどうすれば上手く母乳を出せるか話し合うと「ミルクは赤ちゃんが飲むものだから、赤ちゃんにミルクを飲んでもらえたら、もっと出るかも！」と仁美が言い出した。
そして俺が赤ちゃん役になっておっぱいを吸ってみることに。すると器具を使うよりもスムーズに母乳が出せたので、それ以降、俺は母乳を出す手伝いをするようになった。
ちゅる～
ちゅぱっ
むにむに

当時はおままごとの延長線のような感覚で、
それに仁美のためになると思ったので、
彼女のおっぱいを吸うことに抵抗はなかった。
ただ、さすがに当時でも恥ずかしさはあったので、
誰にも仁美のおっぱいを吸っていることは
言っていない。
ゴクッ
んぐ…なんか最近…
量が多くなってきた気がするな
ちゅぱ

はぁはぁ
もしかすると成長して母乳の量が増えちゃったのかも
最近ますますおっぱいが大きくなった気がするし…
ちゅるるっ
んちゅ
ちゅぱ
外で漏らさないように気をつけなくちゃ…んんぅ

でも、こうして歩武くんがミルクを出してくれるの…
とっても気持ちいいから…
量が増えてこの時間が長くなるのは悪くないかも…
…吸う方の気にもなってくれ
ばあ
ばあ
ソリ
ソリ
ちゅル
ちゅ
ちゅぱっ
むにゅう

んんっ♡
ニャニャニャ
でもさ…歩武くん
私のおっぱい好きでしょ？
あっ
歩武くんも私のおっぱいを
長く堪能できるから
悪くないんじゃないかな？
……
ちゅぱ
ちゅる
ちゅぱ

その言葉には答えず、
俺はより母乳を搾り出そうと
吸う力を強める。

あん♡

んあッ♡

んあああっ！
そんなに恥ずかしがら
なくてもいいのに…

ちゅぱ

ちゅぱ

むにゅう

むにゅう

私のおっぱいミルクは
歩武くんのものなんだから
もっともっと飲んでね

たくさん飲んで…
大きくなるんだよ…

おっぱいを吸われる時の仁美って
どうも母性が強くなるんだよな…
はぁ♡
はぁ♡
…別に嫌なわけではないけど
もみもみ
ちゅぱっ
ぴちゃっ
ぴちゃっ
ちゅる、
ぺろぺろ
むにゅう
いい子、いい子…
本当にいい子だね歩武くんは…
たくさんミルクを飲んでくれて…
も、もう…わた、し…あ、あぁっ！
はぁはぁ

ぐりぐりぐり、
ビクッ…
ビクッ…
ん～～～
ビ～～～

はぁ……っ♡

ミルク…いっぱい出ちゃった…

ビクッ♥ ビクッ♥

んっ♡

歩武くんに吸ってもらえてすごく気持ちよかったよ ありがとうね…

とろ… とろ…

おかげで…おっぱい軽くなったよ…

でも、まだ出そうだな…

はぁ♡
…うん
ふぅ♡
でも、私ばかり申し訳ないから今度は私が歩武くんのミルクを出してあげるね
もう限界でしょ？

仁美はそう言って
俺の下腹部へと目を向ける。
誤魔化すことができないほど
俺のチ●ポはズボンを押し上げて
その存在を主張していた。
ギュー
ギュー

ミルクをいっぱい飲んでもらったし…
ニコッ
今度は私がしてあげる番だよ♪

仁美はそう言って起き上がると、
俺を押し倒して手際よくこちらの
ズボンを脱がせた。

すっごく大きい…
歩武くんも成長してるんだね

初めてした時よりも
比べものにならないくらい
おち●ち●大きくて、硬いよ

ぬぷっ

むにゅう

じゅぷっ

おっぱいで俺のチ●ポを
挟み込んだ仁美は感慨深そうに呟いた。

こんなふうにエッチなことを
始めたきっかけも仁美からの提案だ。

あれは●学生の中学年に上がった頃、
仁美が自分の体質のことを調べて、
エッチなことをすると
母乳が出やすいということを知った。

ちょうど性知識を身に付け始め、
好奇心もあって、
仁美はエッチなことをしようと言い出したのだ。

ぬぷっ
ぬぷっ
じゅぷっ

正直、あの提案は助かった…
俺もその頃は仁美を女として見るようになってたからな
おっぱいを吸うだけで何もできないのは辛かった…
ぷちゅ
ぷるっ
じゅぷっ
じゅぷっ

そして性的な快感を知った俺たちは、
母乳を出すための一環として、
エッチなことをするようになった。

ちなみに実際にエッチをして、
興奮することで仁美の母乳の出は
よくなっていた。

ふふっ
私のミルク
どんどん出ちゃってる

歩武くんのミルクを
搾り出したいのにぃ…

ぬちゅッ
ぴくぴくぴく
ぴく
ぬちゅッ
ビロォ。

だったらもっと頑張らないとね

歩武くんの我慢汁に
私のミルクが混ざり合った
ぬるぬるの天然ローション

これでおち●ち●を
にゅるにゅるシゴいて
あげるからね

じゅぶっ
ぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅ
じゅぶっ

うっ…ヤバい…
このままだとすぐ出そうだ…
いいよ、出して
はっ♡
はっ♡
私のもたくさん
出してくれたんだからさ
歩武くんのミルクも
いっぱい出して…♡
ぬちゅッ
じゅぷ
じゅぷ
じゅぷ
じゅぷ

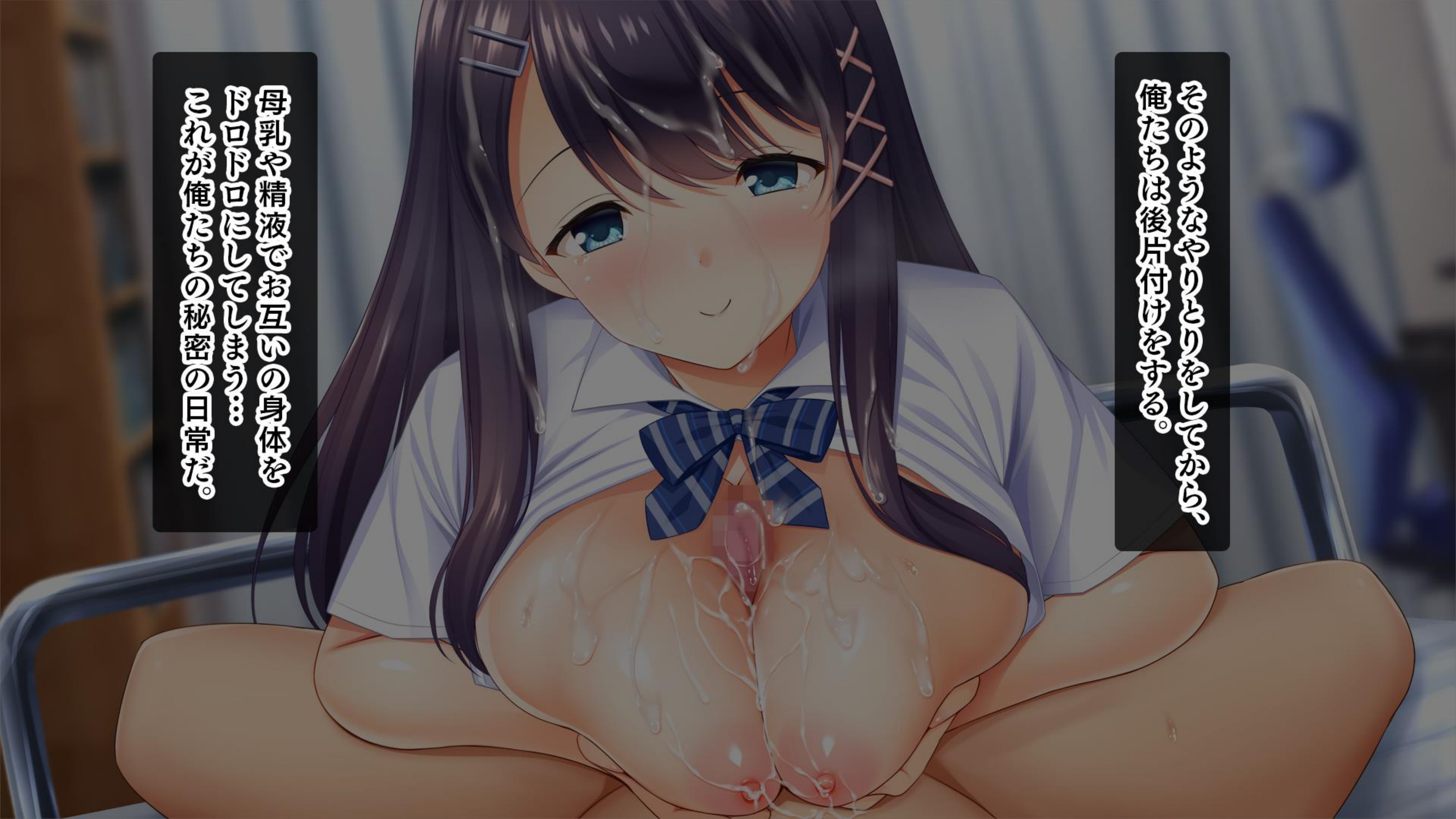
母乳が溢れていく様子から
仁美が興奮しているのが分かる。
チ●ポへの刺激も強いが、
母乳が出るたびに室内に漂う
甘い匂いがますます強くなっていく。
この甘い匂い…
頭がクラクラする…
それに…興奮する…っ！
ん♡
ふう
パチュ
パチュ
パチュ
ぬぷぷ
ぐちゅ…
ドプ…ドプ…

歩武くんのおち●ち●おっきくなってきた…
出るんだね…ドロッとしたおち●ち●ミルクが…
はぁ♡
いっぱい、いっぱい…出して、ね…っ！
ん♡
んぁッ♡
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

んぅ♡
どぴゅ

歩武くんのミルクの量も…前と比べて…だいぶ増えたね
それに匂いも濃くなってる気がするよ
ふう♡
はぁ……♡
歩武くんも成長してるんだね…
ドクッ
ドクッ
ドロォォォ♡

…お互いの成長を母乳と精液で確かめ合うのってどうなんだ？
ふふっ
そうだね…でもさっ、私たちだからこそって感じがさ
特別感があっていいと思うよ
そうか？


そのようなやりとりをしてから、
俺たちは後片付けをする。
母乳や精液でお互いの身体を
ドロドロにしてしまう…
これが俺たちの秘密の日常だ。

J●になって
母乳の量が増えた…

もしかすると
母乳を出す頻度を増やさないと
いけないかもしれないな

そんなことを思った翌日―

この続きは、本編でお楽しみください！！